

ひとひと
ともに担い、ともに築く女と男の情報誌



ねっとわあく

No.44

こども未来絵

それぞれが自分色に輝くために



- P2~3 クレヨンハウス 落合 恵子さん
- P4~5 児童文学作家 草谷 桂子さん
- P6~7 絵本作家 鳥の巣研究家 鈴木 まもるさん
- P8~9 静岡市立清水興津小学校教諭 石田美紀子さん
- P10~11 アトリエ「カラーポケット」 清水 裕泰さん
- P12~13 わたしのまちの「さんかく」じまん!
- P14~15 女性のチャレンジ支援策について

「子どもも未来絵」

それぞれが

自分色に輝くために

あなたの子どもの頃の夢は何でしたか？
それぞれの子どもが自分色に輝いて
夢がもっともっと大きく広がるように。
それぞれが大切な人と人として
お互いに認め合い
自分の存在に自信を持って
夢を実現させることができるように。
無限に広がる子どもの可能性を
女だから、男だからという枠を
はめることによって狭めたくない。
そのために私たち大人ができることは
何でしょうか？大人が気づいて
まず変えていくことを一緒に探して
今すぐはじめてみませんか？



その子の人生は その子のもの

クレヨンハウス代表取締役社長

落合 恵子 さん

落合恵子さんは、二十九年前に「子どももや女性、高齢者など社会的に声の小さい側（＝それは最初から小さいのではなく、声を小さくさせられている側）の人権や自分であることの大切さを確認できる場所」としてクレヨンハウスをつくりました。

そこで、大人たちはどういう意識を持って子どもとかかわっていけばよいのか、また、どう周りに伝えていけばよいのかを聞きました。



MOMO作
(クレヨンハウス出版)

やわらかなノックを したい

「クレヨンハウスをつくられた理由やそこに込められた思いを教えてください。」

それは、学ぶきっかけ、気づきのきっかけのスペースを持ちたかったからです。たとえば、人権の講演会をやっても、本当に聞いて欲しい人は出てこない。直接当事者に訴えるというハードなノックも必要ですが、それが激しいと、それだけで心をとざしたり、カギを掛けてしまわれる方が残念な気がします。つねづね、もっとやわらかなノックの仕方がないかな、と思っていました。

さりげないけれど、メッセージを持った本が揃っていて「みなさん、いつで

もどうぞ」の場所が欲しい。食卓から環境問題も考えられるからオーガニックレストランや市場も欲しい。地球環境に配慮したもの、安心な玩具も扱いたい。普段の生活を通して、人々の柔らかな部分にノックをしたいと思ったからなのです。

「ジェンダーにとらわれないで子どもを育てていくことの大切さはどこにあるのでしょうか？」

その子の人生はその子のものなのに、大人の社会が歴史的に社会的に文化的に作り上げてきてしまった刷り込みと偏見で、その子に選択をさせないというのは、やっぱりやってはいけないことですよ。私の好きな言葉に
I can't live your life
というのがあります。

私はあなたを生きることができない。



つまり「あなたを生かせることができるのは、あなたなのです」ということ。

私たちは、あらゆる場面において、同世代や配偶者、親、そして子どもへも、この意識を持ち、向かい合うことが大切だと思います。

また、あらゆるものに対してセンシティブ(敏感)になつていくことも大切です。その子がその子であることをはばむ、あらゆるものにセンシティブになつていくことが大事だと思います。

子どもが、その子らしく自分色を持ち続けるためには、どうしたら良いでしょうか？

自分色を保ち続けるのも大切ですが、特定な色だけって何か成長しないままにいくような感じですよ(笑)。それをベースに、その上にさらにその時点、その時点の自分色が重なつてい

くのが理想でしょう。そしてグラデーションが出てきた自分色を持ち続けるためには、本人や周りがその子の自分色を認めること。子ども時代に、やわらかな自分色を知った子は、相手の自分色も大事にすると思います。

素敵になつたあなた を見せていく

「あれ？それっておかしくないかな」と思うことがあつても、それをどう表現して良いかわからない時があります。

あなたが、「おかしいな」と気づいたら、気づきそうな人にノックをしてみるといい。全く興味が無い人はちょっと難しいかもしれないけれど、たとえば環境とかメディアに関心や問題意識

を持った人というのは、他のものへも共感してくれるかもしれない。そうなたった時には、その声を少しづつ広げていく。

大切なのは語り続けていくこと。途中で疲れたり、諦めちゃったら終わり。だから無理をせずにやっつけていこう。

それから、あなたのところのお子さんが「あら、あの子すごく素敵ね。なぜあんな風に伸び伸びとしているの？」って思われて、たぐり寄せていたら、「あ、あそこの家は、ジェンダーというものにとられない形で子育てをして、子どもたちもそう育っているんだ」と。それに気付く人は必ずいる。

もう一つ。私たちの意識の多くはメディアで作られるから、テレビドラマや小説、新聞の報道、そういった大勢の人を対象としたマスメディアの表現物の中にジェンダーの意識がとても色濃くないか、暴力的な意識や人間の心に偏見を植え付けるような何かが多くないか

をチェックすること。そして「おかしいな」と思った時には、どんな方法でも良いから異議申し立てをしていく。

自分自身に対しても ノックを

私たちが今後、男女共同参画やジェンダーに対して偏見を持たなくなつたとしても、じゃあ障害を持つている方に対して偏見はないか、在日外国人の方やイラクの国民に対してはどうかって問いかけていいたら、あるかもしれない。とするならば、やっぱり自分も自分自身へノックし続けなければならぬでしょう。

他者へのノックと同時にマスメディアへのノック、そして自分自身へのノック、いろんなノックが必要だということですよ。

話が戻りますが、相手が子どもであっても他者の人生を自分の思い通りにするというのは、なんと罪深く、なんと責任重大なことなのか。積極的に自分のなかにその「他者感覚」を育てていくことが最も大切でしょう。それにはまず、「自分というの自分一人しかないよな」という、自分に対する正当なる愛情と認識を持つこと。それができないと周りに対しても絶対そう思えないって気がしますから。





本の中には

すてきなモデルがいっぱい！

児童文学作家

草谷桂子さん

(静岡市)

子どもたちに文庫のおばさんとして親しまれる草谷桂子さんのもう一つの顔は、児童文学作家です。

著書や絵本の講座を通して、子育て中のお母さんやお父さん、そして子どもにかかわるすべての大人に「女らしさとか、男らしさに縛られないで、子どもの個性を大切にしてほしい」と、伝えていきます。



ジェンダーの視点で書いた絵本

「おばさん、ただいまー」

「あ、さっちゃん、おかえり」

火曜日の午後三時過ぎ、子どもたちが「トモエ文庫」にやってきました。

草谷桂子さんは、二十三年前から地域の子どもたちに、自宅を家庭文庫「トモエ文庫」として開放しています。文庫活動を通して、多くの子どもたちに、本の楽しさ、素晴らしさを伝えてきました。

児童文学作家でもある草谷さんは、昨年、「女らしさ・男らしさ」というバリエーションから解放され、個性と多様性を尊重する視点で書いた三冊の絵本『プレゼントはたからもの』『おきやくさんはいませんか？』『ぼくはよわむし？』（大月書店）を、出版しました。

総合学習で使う男女共同参画に関する本や、様々な自治体で出す啓発絵

本はあります。しかし草谷さんは、男女の枠にこだわらないで自分らしく生きることを、普通の絵本の中で普通に伝えたいと思いました。

絵本の楽しさとか奥深さがまず先にあって、ふと気がついたら、多様な生き方を示してくれる本。読んでいるうちに、自分が「男は…のようなもの、女は…のようなもの」と思いこんでいることや、「赤は女の子の色、青は男の子の色」というように決めつけている自分に気づく（※ジェンダーバイアスを持つていることが分かる）本。そんな本がほしかったのです。

ジェンダーにとらわれない考え方を広めたい。でも、本を道具に使うことの怖さも知らなくてはいけないと思っていた草谷さん。その両方を知っている自分にできることは何だろうと考えました。

「作られた『女らしさ・男らしさ』に縛られないで生きることが、ごくごく当たり前の自然な生き方。特別に取り上げるようなことではないと、いつも私は思っているの」

自分が書くのなら、まず子どもが楽しんで読んでくれることが第一。本の中でいろんな生き方に出合って、「これもあり」「あれもあり」と自然に思ってくれたらいいと、固定的な女性像・男性像にとらわれない三冊の絵本ができあがったのです。

梓にはめないで

外国の絵本には、女の人が生き生きと描かれています。職場や家庭、様々な場面で活躍する女性、育児をする男性。子どもたちも男女にかかわらず躍動感にあふれ、自由に楽しく遊んでいます。それに比べ日本の絵本では、女性は家事をしている場合が多いようです。

草谷さんは「女の人が自分らしく生きることが、家族みんなの幸せにつながるのではないだろうか。だれかの我慢の上に成り立っている家族の幸せは、本当の幸せじゃない」と、考えるようになります。

今までは、「女だから・男だから」という固定的な梓にはめ、その梓に合う選択が大事にされ、それが当たり前前でした。そのため、梓の外の人は生きにくさを感じていました。

ところがその梓をはずすと、今まで梓の中にいた人はもちろん、梓の外にいた人もあるがままに生きられるようになりま



す。どちらがいい悪いではなく、それぞれの選択を大事にすること、「かくあるべし」という呪縛から解き放されることで、みんなが自分らしく生きられると気づきました。

梓の外にいる人の生き方もすごく魅力的なことに気がつくのはそんな時。梓をはずすことで可能性も、ぐんと広がります。

子どもは ずんずん変わって、 どんどん 成長していく

「私が文庫をやってきて一番感じたのは『子どもはずんずん変わる』ってこと。子どもは、いつどう変わるかわか

らないんですね。昨日と今日では全然違うこともある。『うちの子はこうです』と言う人が多いけれど、『まだこれしか生きていないのに決めつけないで』って思うわ」

若いお父さんやお母さんたちに、変わるのが子どもであり人である、というのを信じてもらいたいと思います。

「私は子どもに、ああしろこうしろと、ほとんど言いません。子どもは友達とかかわりあいの中で、どんどん成長していく。子ども自身が育つ力を持っているので、それを信じて、本当に必要な時だけ手を差し伸べれば大丈夫」

文庫では、相談があれば聞きますが、読書指導は一切していません。子どもが自分で読む本にも一切干渉しません。どういう本であれ、本を選ぶ権利は子どもにもあるからです。

ただ、草谷さんが読み聞かせをする時には、ジェンダーの視点を持った本や、読んでほしいと思う本を、意識的に選んで読みます。

大人には、図書館や女性会館・公民館が開く講座で、草谷さんの考えをきっちり伝えていきます。

「世の中には、皆さんが思っている以上に多様な生き方があります。こんなに楽しい絵本が、こんなにたくさんある生き方の見本を見せてくれるってことを紹介すれば、みんな目からうろこだ

と思うんですね。自分が今まで思っていたパターンだけじゃない生き方が、現実の世界にもあるし、絵本の世界にもある。

そのことに

気づいてくれれば、もうそれで十分。あとの判断は皆さんに任せればいい」

お母さんやお父さん自身がのびのびと、梓にとらわれず生きやすいように生きれば、子どもに対する決めつけもなくなります。

「自分が育った頃の物差しをそのまま当てはめてはいけません。もう時代は変わっていますからね。これからの子どもたちには、個性をのびのび発揮して、生き生きと成長してほしい。子どもの柔らかな感性が、型にはめられたり、摘み取られることなく、生まれたままの可能性を持ち続け、大きな花を咲かせるように……」

トモエ文庫では、子どもの心を解きほぐし、様々な生き方を提示してくれる本たちが、やさしい笑顔の草谷さんと一緒に、子どもたちを待っています。

